豊後高田市の文化財

概要
国指定文化財
国登録有形文化財

豊後高田市教育委員会

－ 目　　次 －

第１章　豊後高田市の歴史 …… 1

第１節　豊後高田市の概要 …… 1

第２節　豊後高田市の歴史的環境 …… 2

第２章　豊後高田市の文化財 …… 3

第１節　豊後高田市の文化財の概要 …… 3

第２節　国指定文化財 …… 4

第３節　県指定文化財 …… 18

第４節　市指定文化財 …… 45

第５節　登録有形文化財 …… 79

附表　豊後高田市文化財一覧 …… 84

文化財保護の体系 …… 88

第1章　豊後高田市の歴史

第１節　豊後高田市の概要

本市は、大分県の北東部、国東半島の西側に位置し、東経131°　26′、北緯33°　33′、東西の距離17.1km、南北の距離23.2km、総面積は206.6㎢で、西は宇佐市、東は国東市、南は杵築市と接している。

また、大分市まで約60km、北九州市まで約90kmで、両市に比較的近い距離にあり、北は周防灘に面し、豊かな自然と温暖で過ごしやすい瀬戸内式気候に属している。

地域の東部から南部にかけては、ハジカミ山、尻付山、両子山や日本三叡山に数えられる西叡山等の山々が連なり、国東半島のほぼ中央の両子山から、放射状に谷や峰々が延びた地形となっており、その谷間を桂川、真玉川、竹田川が走り、河口付近に市街地が形成されている。

域内には、瀬戸内海国立公園及び国東半島県立自然公園を擁し、山間部及び海岸部の自然景観や農村集落景観、六郷満山文化ゆかりの史跡等、豊かな自然と歴史文化などの地域資源が豊富である。

昭和にかけて町村合併により、昭和29年に豊後高田市、真玉町、香々地町の１市２町が誕生した。

その後、我が国の産業構造の変化に伴う都市部への人口流出により、過疎化、高齢化が進行したため、新たな時代の変化に対応すべく、平成17年３月31日に１市２町が合併し、人口26,101人（男性：12,207人、女性：13,894人）、新生「豊後高田市」が発足した。

第２節　豊後高田市の歴史的環境

豊後高田市域は古代から宇佐神宮や弥勒寺の開発によって拓かれ、平安時代中・後期から各所に荘園が誕生した。田染荘・小野荘・来縄郷・都甲荘・真玉荘・香々地荘・臼野荘・草地荘といった市内の荘園は、宇佐神宮領や弥勒寺領として寺社を支えた一方で、宇佐さらには京都の洗練された文化を国東半島に持ち帰った。

国東半島で独特の山岳仏教を生み出した六郷山寺院の内、長安寺・天念寺・霊仙寺・無動寺といった重要な寺院は市内に位置している。これらの寺院は、平安時代中期頃に天台宗の影響を強く受けて誕生し、鎌倉時代には将軍の祈願所として崇敬を集め、一つの大きな宗教的空間として成立した。その文化は「六郷満山文化」と呼ばれ、天念寺の修正鬼会や、長安寺の太郎天像、各所の国東塔、峰入り修行などが、その興隆ぶりを今に伝えている。

豊後高田市では武士の活動も多くみられる。鎌倉時代の都甲氏・真玉氏らは元寇などで活躍したほか、戦国時代には大友氏の重臣吉弘氏・田原氏などが市域で活躍した。彼らは次第に荘園や寺院を支配するようになり、その足跡があらゆる所に残されている。

江戸時代に入ると竹中氏による高田藩が成立したが、わずか数年で所替えとなり、高田地域は島原藩に編入された。その後、江戸時代の高田は陣屋町として栄え、桂川沿いに屋敷が広がっていった。その町並みは、後の「昭和の町」につながっていくものもある。

また江戸時代を通して、鋳物師や石工等、職人の活動が民間へと広がっていった。これによって農業の技術が向上し、石造物が市域にあふれた。市内に所在する仁王像や板碑・石塔のうち、江戸時代に造られたものも数多くみうけられる。

様々な世界との交流の中で文化を作り上げてきた豊後高田であるが、その一方で独自の文化を守り抜いてきた。例えば田染荘には、伝統的な手法によって稲作を行い、中世の水田の姿を今に伝えている人々がいる。このように伝統と文化を伝えようという豊後高田の人々が、多くの文化財をこの地に残したのである。

田 染 荘

昭和の町

第２章　豊後高田市の文化財

第１節　豊後高田市の文化財の概要

国東半島は中世石造品の宝庫としてつとに知られているが、豊後高田市域でも磨崖仏の他に、特有の宝塔形式をもつ国東塔をはじめとして宝篋印塔・五輪塔・板碑・石殿など多種多様な石造品が数知れず存在している。

また、自然の風光の中に古代末から中世にかけて六郷満山の名で総称される天台宗寺院が相次いで開かれ、多くの石造品や木彫仏などが残された。九州唯一の平安時代の木造建築物であり、日本を代表する阿弥陀堂建築で国宝の富貴寺大堂、国指定重要文化財の大堂壁画や阿弥陀如来坐像、真木大堂の九体もの国指定重要文化財の仏像群、さらに屋山長安寺や天念寺などはこのような六郷山の仏教文化の隆盛の中で生み出されたものである。また豊後高田市では、国指定の無形民俗文化財である修正鬼会や江戸時代中期に始まったといわれるホーランエンヤ、草地踊り、若宮八幡神社秋季大祭など多くの祭りが現在に伝えられている。

富貴寺大堂（国宝）

熊野磨崖仏（国指定重要文化財）

第2節　国指定文化財

富貴寺大堂　附旧棟木の部分

■有形　■指定日：昭和27年11月22日　■所在地：田染蕗　■年代：平安時代後期

九州最古の木造建築。阿弥陀堂建築としては京都の平等院鳳凰堂が著名であるが、当時の都であった京都近辺には意外に少なく、むしろ地方に多くが点在する。富貴寺大堂もその一つであり、明治 40 年 (1907) に特別保護建造物、1952 年 (昭和 27) には国宝に指定されている。

構造は正面 3 間 (7.7m)、側面 4 間 (9.93m) の本瓦葺宝形造で、奥行きが長いのに宝形造の屋根をのせるのは珍しい。四周に切目縁をめぐらし、柱間の正面各間、背面中央間と側面前二間を外開きの板扉とし、その他は板壁とする。柱は方一尺の角柱に大きく面取りを施し、柱上は舟肘木を置いて丸桁を受けるのみの簡素な斗栱となっている。軒は二軒繁棰とし、軒の出はかなり深い。屋根は行基葺で、軒先瓦は平瓦瓦当文が蓮弁、丸瓦瓦当文が線刻陽刻した仏図像である。この仏図像は菩薩像や如来像など四種類が知られ、大堂内部の外陣壁画に対応する四方仏と考えられている。

大堂内部は、本尊阿弥陀如来坐像を安置する須弥壇まわりを中心に、内陣・外陣の板壁の随所にわたって多数の仏菩薩諸尊が群集するさまが描かれ、全体として壮大な仏画世界を構成している。

木造阿弥陀如来坐像

■有形　■指定日：昭和25年8月29日　■所在地：田染蕗　■年代：平安時代後期

富貴寺大堂の本尊。像高 85.5cm。榧材。頭部と体幹部を一材で彫成し、頭部で割り放して内刳りをほどこし、後頭部と背面部に蓋板を矧ぎつける。また、体幹部に左肩外側地付部までと両膝部や両手部を矧ぎ寄せる。とくに左肩外側部と両膝部の用材に本心をのこしているのは特異な技法である。現在、像は素地を露呈しているが、当初は彩色像であった可能性が強い。ゆるく半円形に盛りあげた肉髪をもつ頭部には細かな螺髪を切付け、まるい顔面には切長の伏目や小さな口やつつましやかな唇を刻み、おだやかな表情をつくる。撫肩ではどよい肉づけの体部を浅く柔らかな曲線をもつ衣文がゆったりとつつみ、膝下に繰りこまれた裳の処理も巧みに表現されている。ふくよかな面相、やわらかな曲面を強調して調和のとれた姿態などは、平安後期の定朝様の作風をよく伝えた作品。当時の国東地方における造像が、いかに高い水準にあつたかを示す好例として注目すべき存在である。

木造阿弥陀如来坐像

■有形　■指定日：昭和25年8月29日　■所在地：田染真木　■年代：平安時代後期

像高 216cm。真木大堂の本尊。丈六の坐像で檜材の寄木造り。左手を膝上に置き右ひじを曲げ、来迎印をとる。彩色は全面に布貼りの下地を施し、肉身に漆箔、螺髪に群青、衣に朱色が塗られています。伏し目の円満相に、体部を覆う流れるように軽やかな衣文さばきなどに 11 世紀後半、中央で流行した定朝様の摂取がみとめられる。肩幅の広く厚みのある量感のある体躯、肉髻高く大粒の螺髪を刻み、やや面長で唇を強く引き結んだ面相など、随所に定朝様以前の古い様式がみられる。

真木大堂は、平安期には馬城山伝乗寺という六郷山本山本寺であったとされ、一帯には多くの坊が立ち並び、盛大な仏事が行われていたとされるが、その様態を示す史料は乏しく、現在では本尊を含め 9 体の重要文化財の仏像によってうかがい知れるばかりである。特にこの阿弥陀如来坐像に関しては、中央で流行した末法思想と同時代的な文化の所産であり、日本文化史全体から見ても非常に貴重な仏像である。

木造四天王立像

■有形　■指定日：昭和25年8月29日　■所在地：田染真木　■年代：平安時代後期

真木大堂の木造阿弥陀如来坐像の周囲に立つ四躯の守護神像。画像は左から西方の広目天(166cm)、南方の増長天 (158cm) 、北方の多聞天 (162cm)、東方の持国天 (161cm)。

造形がぎこちなく、阿弥陀如来像が造られた後に在地仏師によって造られたと考えられる。四天王はそれぞれに甲冑をまとい、籠手と脛当をつけ、沓を履き、武器を持って邪鬼を踏んで立つ。

広目天は冑をかぶらず結髪し、髪際で炎髪を高く立てる。顔は正面を向き、腰を僅か右に振り、右手を上げて持物を持つ。持国天は顔を左下方にうつむかせ、腰を右に捻って両手を胸の前に構えて持物を握り、増長天は顔を右下方にむけて口を開き、左手を大きく振り上げて持物を執り、多聞天は顔を少し左下方に向け、腰を左に捻って左の掌にのせた持物を睨む。各天は厳しい形相で邪鬼を踏みつけ、阿弥陀如来坐像の四方を守っている。

木造大威徳明王

■有形　■指定日：昭和25年8月29日　■所在地：田染真木　■年代：平安時代後期

像高 241cm。真木大堂の中心的仏像の一。本地は阿弥陀如来であり、西方を守護して人々を害する毒蛇・悪竜・怨敵を制圧する。神使の水牛に跨っている姿で表現される一般的な形式をとる。

像は六面六臂六足の忿怒相に表され、一見二目のように見えるが、正面の顔の額にはかすかに第三目が彫りだされている事が分かる。頭・体の主要部は樟材の一木造り、背刳りを入れて蓋板をはめる。手足部は檜材で矧ぎ付けている。水牛は頸部から体部を左右に二材を矧ぎ付け、頭部、耳、角は別材を寄せている。

大威徳明王像自体、国内の作は少なく、真木大堂の像は国内最大のものである。各部の造形も良く、保存状態も極めて良い。平安期国東半島の洗練された仏教文化の成熟を示す代表的な仏像と評価できる。

木造不動明王像及び二童子立像

■有形　■指定日：昭和25年8月29日　■所在地：田染真木　■年代：平安時代後期

像高は中央の不動明王像 255cm、右の矜羯羅童子 127cm、左の制吒迦童子 130cm。不動明王は榧の寄木造り、童子は檜の寄木造り。

大日如来の命を受けて悪魔を撃退し、災害悪毒を除き、煩悩を断ち切り、行者を守り、諸願を成就させる。矜羯羅童子・制吒迦童子の二童子を従えた三尊形式であり、国東半島の不動明王像として典型的様式を持つ。

不動明王像は頭髪を巻髪とし、弁髪を左肩に短く垂らす。丸顔の面貌は左目を眇めた天地眼とし、唇端に牙を上下出し、忿怒相を表す。上半身に斜めの条帛をかけ、下半身に裳をつけ、右手に剣、左手に分銅のついた羂索を執り、臂釧・腕釧をつけ、迦楼羅の火焔光を負って岩坐に立つ。

矜羯羅童子は正面を向き、眼を見開き合掌する。制吒迦童子は口を引き結び、眼を伏せ、顔にやや渋面をつくり、棍棒を持つ右手に左手を添えて立つ。

銅板法華経　附　銅筥板

■有形　■指定日：昭和25年8月29日　■所在地：加礼川　■年代：平安時代後期

縦 21.0cm、横 17.8cm の銅板が 19 枚ある。長安寺の裏山から出土したとされる 19 枚の銅板法華経。色紙型の鋳銅板の表裏に法華経八巻を楷書で刻む。各葉とも表裏に 28 行の縦罫をひき、さらに上下二段に別ける。この 1 段は写経の通例に従って 17 字詰に経文を刻むが、上下書き流してあるから、一面 28 行 34 字詰となり、字詰の状況から推測すると当初は 37 枚であった事が知られている。本経を収めたと考えられる銅筥の側板 4 枚の表裏には、銘文だけではなく六観音像や種字が毛彫りされ、銘文から保延 7 年 (1141) に書写したことが分かる。線刻の六観音像は素朴な表現ながら、12 世紀の絵画史料として注目される。

本経が注目されるもう一つの所以は、銘よりその成立の過程が分かる点にある。銘に見える本経の作者である宇佐宮の紀重永は、翌年に求菩提山、4 年後には彦山といった修験の山々に銅板法華経を残している。また、素材となる銅については、石清水八幡宮と六郷山寺院が協力して集めたものである事も分かり、本経は平安時代の北部九州の修験道の霊場同士、もしくは中央寺社との結びつきを確認できるものである。

熊野磨崖仏

■有形　■指定日：昭和39年5月26日　■所在地：田染平野　■年代：平安・鎌倉時代後期

熊野社の参道からそれた所に所在する県内最大級の磨崖仏。硬い岩壁に彫られた大日如来・不動明王の雄大な姿からは、熊野地域の信仰活動の力強さが感じられる。

向かって右の大日如来像は、像高 681.8cm。鋭く隆起した螺髪、角張った顔に刻む癖の強い目鼻立ち、大きな耳、広い肩幅などから、平安時代中期（10 世紀）の製作と考えられ、本県最古の石仏である。

不動明王及び二童子像は、像高 807.0cm。風蝕のため、像容の詳細を明らかにできないが、不動明王に頭頂に莎髪をつけ、弁髪を左肩に垂らし、左眼を細めた天地眼である。左手に羂索、右手に剣を執り、下膨れのユーモラスな表情をたたえるが、全体としては素朴な造形である。通常不動明王の左右に造られる二童子（矜羯羅童子・制吒迦童子）の姿は概形をかすかに判別できるほどであるが、面相・姿態ともに不動明王に類似するものであったと考えられる。製作時期は鎌倉時代の前期頃と推測される。

木造太郎天及び二童子立像

■有形　■指定日：昭和45年5月25日　■所在地：加礼川　■年代：平安時代後期

中央の木造太郎天像の高さ 161.8cm。現在は長安寺の蔵に安置されているが、元々は六所権現にあったとされ、明治初期の神仏分離の際に長安寺に移されたという。角髪を結った太郎天は、左肩先と右手先を除く、頭･体の根幹部を榧の一木から形成し、背面部の首筋･背中・腰・膝裏のあたりで上下四段に分けて背板風に割矧ぎ、内刳りを施している。表情から見られる厳しい表現などは神像彫刻しての特徴をよく表す。六郷満山の特異な信仰を物語る平安時代後期の彫刻として市内を代表するものだと言えるだろう。

左が制吒迦童子、右が矜羯羅童子。共に榧材の丸彫りで内刳りはない。二童子も的確な彫技によって流れるように造られており、秀作と言える。

木造太郎天像は各部材から墨書銘を見る事ができ、この不可思議な姿態の像の意味と製作の過程を確認できる事が貴重である。頭部銘には、不動明王の種字があり、本像の本地が不動明王である事の根拠となっている。また本像を屋山太郎惣大行事と呼ぶべき事や、大治五年 (1130)2 月 15 日から 3 月 18 日にかけて造られた事、御前検校神□幷妻を願主とし、百名以上に及ぶ僧俗の結縁を得たことが分かる。

大堂壁画

■有形　■指定日：昭和53年6月15日　■所在地：田染蕗　■年代：平安時代後期

富貴寺大堂の内壁四面や長押に描かれる彩色壁画内陣来迎壁に阿弥陀浄土図、四天柱に密教の諸尊曼荼羅図、内陣小壁に定印を結ぶ阿弥陀如来坐像五十仕付躰、外陣小壁の東壁に薬師如来浄土図、南壁に釈迦如来浄土図、西壁に阿弥陀如来浄土図、北壁に弥勒善薩浄土図がそれぞれ描かれている。外障小壁の四方四仏の浄土図には堂の対角線に位置して東西に梵天・帝釈天を配し、四方に四天王と四大明王を描く。さらに、内陣の長押や来迎壁の縁には宝相華文と緩綱彩色による荘厳を施す。こうした堂内壁画の統一じた構成内容は、堂内建築の構造と同様に顕教と密教の思想が融合して描かれており、国東地方における特異な仏教信仰形態を反映したものと考えられる。壁画は、自色顔料を下地塗りして、捻紙などの型紙を使って下絵どりし、細墨線で略画風に描いて彩色を施したのちに描き起しを行なっている。仏・菩薩のふくよかな顔面とやわらかな姿態、みやびな色彩などは、平安時代後期の仏画の様式をよく伝えている。

熊野磨崖仏　附　元宮磨崖仏及び鍋山磨崖仏

■史跡　■指定日：昭和30年2月15日　■所在地：田染平野・真中・上野　■年代：平安時代後期

熊野権現社の石段の踊り場に立つ大日如来・不動明王の磨崖仏は県内有数の大きさを誇る。法量や特徴、写真については、国指定有形文化財の部分で提示したので割愛する。この熊野磨崖仏は独特な信仰圏を作り上げた熊野権現社の中心的な建造物として史跡指定もされている。

その影響によって作られたとされる磨崖仏が、田染地域には多くあり、その内元宮磨崖仏・鍋山磨崖仏が熊野磨崖仏に付随する形で史跡指定されている。

左の元宮磨崖仏は田染真中の元宮に作られた事からそう呼ばれる。中央に立つ 203cm の不動明王像を中心に、現在は五体の磨崖仏が確認できる。右から毘沙門天（212cm)、矜羯羅童子（105cm)、不動明王、持国天（188cm)、声聞形尊像（122cm)。制吒迦童子も彫られていたと考えられるが欠落している。室町時代の作とされる。

右の鍋山磨崖仏は田染上野の鍋山の中腹に作られる。中央の不動明王像は 230cm、右の矜羯羅童子 121cm、左の制吒迦童子 121cm。童子はその姿をやっと判別できる程度である。不動明王像は剣・羂索を持ち悠然とした姿が見て取れる。鎌倉時代の作と推定され、『田染村誌』には覆屋を作り磨崖仏を守ってきた過程が示される。

修正鬼会

■無民　■指定日：昭和52年5月17日　■所在地：長岩屋　■年代：平安時代～

長岩屋の修正鬼会の芸能

■選択無民　■指定日：昭和48年11月5日　■所在地：長岩屋　■年代：平安時代～

現在市内では天念寺でのみ行われるようになった六郷山寺院の法会。旧正月に行われる修正会と厄払いの儀式である追儺式が融合して現在のような形になったとされる。

現在天念寺では毎年旧正月七日に行われる。全身を縄で縛った赤と黒の鈴鬼は法会の中で重要な役割を果たす。黒い荒鬼、赤い災払鬼は松明を持って講堂内を走り回り、参拝者と鬼の目と呼ばれる餅を奪い合い、参拝者の背中や肩を松明で叩く加持がなされる。参拝者は国家安穏・五穀豊穣・万民快楽などの諸願成就が遂げられるという。

伝説では仁聞菩薩が六郷山二十八ヶ寺の僧侶を集め、「鬼会式六巻」を授けて創始されたとされているが、史料的初見は鎌倉時代後期の夷山霊仙寺の坪付であり、その頃までには鬼会が各寺院で創始されたとされている。江戸時代末期では、各寺院で勤仕されていたと様々な記録に残っている。長安寺や富貴寺には鬼会の為の面が残り、智恩寺などでは修正会のみが盛大に行われるのみとなっている。

修正鬼会における鬼は必ずしも悪いものではなく、祖霊神の訪問であると考えられており、日本古来の伝統的宗教観がよく現れているという。

木造阿弥陀如来立像

■有形　■指定日：昭和36年1月26日　■所在地：長岩屋　■年代：平安時代後期

像高 198cm。榧の一木造り。元来は天念寺小両子岩屋に安置されたとされる。後頭部から背中にかけて大きく内刳りを施し、大粒の螺髪、張りの強い両頬の肉付け、大腿部のＹ字状の衣文などに平安時代前期の名残を見せながらも、全体としては国東半島の西安物の特色を示している。その為、１２世紀に作られたと推定される。

昭和１６年に長岩屋を襲った大洪水によって、本堂・庫裡などが流され、その再建の為に当像は売却されました。

その後、地域住民の強い要望などから平成９年に買い戻し、平成１５年に実に４２年ぶりの帰還となった。現在は鬼会の里歴史資料館で展示されている。

田染荘小崎の農村景観

■文化的景観　■指定日：平成22年8月5日　■所在地：田染小崎　■年代：中世～

美しい棚田や集落の利用が中世に遡る重要文化的景観。田染荘は平安時代中後期に宇佐神宮の荘園として開発を受け、小崎村の棚田もその頃に拡大したとされる。

雨引神社の湧水や、小崎川の各所に築かれた堰、巨大な溜池は、当該地域の水利形態の始点から完成までの過程が見え、不整形な棚田と合わせて、山間地域での伝統的な農業のあり方をよく示している。

台薗地区の石垣による区画は鎌倉時代からほぼ変わっていないとされる。正和四年鎮西御教書における尾崎屋敷・為延屋敷や、沙弥妙覚所領配分状のかとのいやしき・いつかの屋敷は、神領興行法による裁判の舞台である。尾崎屋敷は近世には延寿寺となったが、戦国時代には後期田染氏の居館として機能しており、土塁や堀の遺構が廻らされる。

田染地域は元禄の頃に、田畑や堂社、住居や道路を示した絵図の写しが伝わっている。それによって近世初期の土地利用・村落・信仰などを多角的に復元する事ができる。

現在、水田オーナー制度の下に、住民による文化的景観の保存活用事業が進みつつあり、農地としての土地利用形態の維持にも期待が持てる。中世の荘園遺跡に起源を持ち、近世から近代にかけて緩やかに進化を遂げた国東地方の農耕・居住の基盤的な土地利用形態を示す文化的景観として価値がある。

第5節　登録有形文化財

旧共同野村銀行社屋

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成21年8月7日
■所在地：新町　■製作年代：昭和時代

昭和 8 年 (1933) に竣工した共同野村銀行の本社事務所。同銀行は、当地の富豪「野村財閥」によって設立された。内部の店舗は、吹き抜けを取り入れた大きな空間となっている。外観は正面の壁をタイル張り、整然と並んだ縦長の上下窓、胴部分の装飾彫刻など古典主義的な様式をデザインした優れた姿形をもっている。

旧高田農業倉庫北蔵

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成22年4月28日
■所在地：新町　■製作年代：昭和時

大分県下屈指の大地主であった野村家が、小作米を収蔵するために整備した米蔵群の一つ。現存する銘版から昭和 12 年 (1937)7 月 10 日の建築であることが分かっている。半切妻造･瓦葺、頂部に 3 か所の越屋根が設けられている。外壁は漆喰塗の白壁。平側に 6 か所の高窓と、瓦葺の下屋を掛けている。現在は「昭和の町三丁目館」として活用中。

旧高田農業倉庫北小蔵

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成22年4月28日
■所在地：新町　■製作年代：昭和時代

旧高田農業倉庫群の一つで、「北蔵」「東蔵」の間に建つ。他の蔵に比して小規模であるが、外観は半切妻造･瓦葺の大屋根のもと、南面は漆喰塗の白壁に米の収蔵口を設けて、他の蔵と調和した意匠となっている。現在は、「昭和の町案内所」として活用されている。

旧高田農業倉庫東蔵

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成22年4月28日
■所在地：新町　■製作年代：昭和時代

旧高田農業倉庫群の一つ。「北蔵」と同様の作りである。

旧宇佐参宮鉄道豊後高田駅に隣接する広大な敷地に東蔵を含む 4 棟 (北･北小･東･南) の大屋根が軒を寄せ合った壮大な米蔵群は、当地の近代農村社会の展開を象徴する歴史的景観といえる。東蔵は現在、「駄菓子屋の夢博物館」「黒崎義介 昭和の絵本美術館」として活用されている。

旧大分合同銀行社屋

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成22年4月28日
■所在地：中央通り　■製作年代：昭和時代

昭和 8 年 (1933)9 月 18 日に竣工した近代銀行建築。木造瓦葺 2 階建。伝統的な和様建築でありながら、半円アーチの高窓や、両開きのドアや石貼りのポーチなどに近代的な洋風意匠が凝らされている。

現在は「豊後高田昭和の町展示館」として活用されている。

春日神社本殿

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：江戸時代

三間社、切妻造、銅版葺。

『三笠山春日神社誌』によれば文化７年（１８１０年）の改築とされ、欅の素木造である点や笈形の形状など１９世紀前半の特徴をよく示している。脇間に比べて中央間が大きくとられる形式は市内では若宮神社にも見られ同時期の神殿の特徴と言える。

春日神社摂社厳島神社

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：明治時代

一間流造、銅板葺。

文政１３年（１８３０年）の棟札では「弁財天宮」とされるが、洋釘が使われ近代の作と確定し、現在の建物とは一致しない事が分かる。身舎には土台を回し丸柱を立てており、庇は身舎とは別に土台を立て、木製礎盤を載せて角柱を立てる。舟肘木上には直接桁を置いている。

春日神社摂社八坂神社

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：江戸時代

一間流造、銅板葺。

柱・縁束・脇障子柱・壁板などは欅材で造られ、和釘による仕事である。建物が壊れた際に「延享」の墨書が認められたというが、様式的にも１８世紀中期の江戸時代建築と認められる。

彩色も蟇股の足は黒、各部材の木口は白、蔀・木鼻・長押・脇障子を朱色と塗り分ける。

春日神社申殿

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：明治時代

切妻造、平入、桟瓦葺。

境内の「奉寄進申告殿」の記念碑から明治３８年（１９０５年）に建てられた事が分かる。平成の大改修においても改修前の構造材は残されており、宇佐宮の影響下にある当地方の神社建築の特徴を良く伝える建築物として大変貴重である。

春日神社拝殿

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：江戸時代

桁行９間、梁間２間、入母屋造、本瓦葺。

回廊とも称される豊後高田・宇佐地域の拝殿であるが、横長で開放的な造りが、宇佐宮の影響を濃厚に示している建築として重要である。拝殿の棟札によれば、大正１０年（１９２１年）に「廻廊建築」の文字があり、その時期の建築となる。但し蟇股は彩色や「天人」「二十四孝」を題材にする所から江戸時代に遡ると考えられる。

春日神社籠り屋

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：昭和時代

桁行三間、梁間二間、切妻造、平入、桟瓦葺。

『三笠山春日神社誌』によれば、昭和２年（１９２７年）に改築、平成１０年に屋根葺替え、平成１４年に改修とある。地域の鎮守である春日社に人々が集まったり、神楽の楽屋に利用したりした。

春日神社神楽殿

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：江戸時代

梁間二間、桁行三間、入母屋造、本瓦葺。

『三笠山春日神社誌』によれば、天保６年（１８３５年）に改築、平成１４年に本瓦で全面葺替えとある。部材から天保の建築と認められる。屋根の妻を正面に向ける。左後方には斜めに橋掛があり、籠屋とつながっている。

春日神社鐘楼

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：江戸時代

桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺。

文政１３年に鐘楼を修理したという棟札があり、その後昭和・平成の改修によって部材が入れ替えられたが、当初材と見られる部材は文政のものと認められる。内部には「紅葉に鹿」などの浮彫が施される。鐘楼は仏教的要素とみなされ、神社に取り入れたこの地方の神社建築のあり方を示す歴史的遺構として貴重である。

春日神社神門

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：江戸時代

一間一戸、四脚門、切妻造、平入、本瓦葺。

角釘の使用が認められ、弘化２年（１８４５年）の棟札の記述「本門建替」からも、その頃の建築だと言える。丸柱と角柱を使い分ける。絵様鼻木を付け、妻飾は虹梁大瓶束。内部には格天井を張る。

春日神社西門

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：江戸時代

一間一戸、薬医門、切妻造、本瓦葺。

『三笠山春日神社誌』には「西紅門」と記される。その名の通り木部の大部分には朱色の塗装が認められる。造営年代は不明ではあるが、文政元年（１８１８年）に改修されたという記事がある。部材の経年感からすれば江戸時代のものと言えるだろう。

春日神社余興舞台

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：昭和時代

桁行六間、梁間四間、入母屋造、セメント桟瓦葺。

棟札により昭和２７年（１９５２年）に神社の氏子によって建設された。構造的にも非常に珍しく、戦後からこの地域の人々の重要なレクリエーションの場となった貴重な建造物。

春日神社参道鳥居

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：江戸時代

春日神社の神域の南端入口に立つ明神鳥居。正面向かって右の柱には「奉寄進国東郡草地之住　安部善兵衛包好」左の柱には「享保五〈庚子〉年孟夏吉祥日　山田□」と彫られている。春日神社の境内に置いて最古のもので、景観上欠く事も出来ない重要性を持つ点で貴重である。

春日神社西参道鳥居

地図番号 00

■登録有形　■指定年月：平成23年10月28日
■所在地：草地　■製作年代：昭和時代

石製の明神鳥居で、境内の西参道の入り口に建つ。かつては、この鳥居と正面参道の鳥居の他に、東側の道路からの入り口にも三つの鳥居があったようだが、東の鳥居は失われている。この鳥居には「奉献　安田碩蔵」「昭和九年十月吉祥日」と銘がある。宇佐神宮と境内の配置が近い春日神社にとって重要な参道に設置された可能性が高い。